

Selected Works of  
Chihei Nakamura

## 作品紹介

### 失踪・太宰治へ (1935年)

太宰治の自殺未遂を題材に、ライバルへの複雑な感情を描いた「失踪」。同作を読んだ太宰からの反応に対する返事として発表された「太宰治へ」。この作品は地平の職業作家としての決意が描かれる。

### 南方郵便 (1938年)

宮崎の明るい風土と楽天的な人々をユーモア豊かに描き、南方文学の典型と評された秀作。自然と死生観が大らかに調和した中村地平の代表作。

### 霧の蕃社 (1939年)

台湾での抗日蜂起「霧社事件」を入念な調査に基づき小説化。美しい風景を背景に、植民地政策が生む支配と差別の構造が描かれる。

### 子供の像 (1948年)

戦時下の宮崎へ疎開中に迎えた長女の危篤とその危機からの脱出を描いた話。空襲や病気という死の隣にある、幼児の生命力と自然の美しさを綴っている。

### 八年間 (1950年)

自身の結婚、闘病、疎開生活を回顧した自伝的作品。妻への深い愛情と感謝を綴っている。第1回宮崎県文化賞を受賞した。

PROFILE

## プロフィール

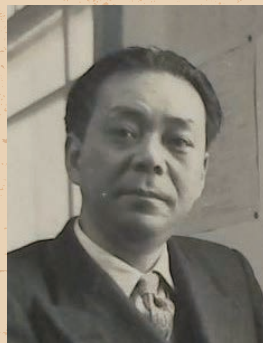
「北の太宰、  
南の地平」  
と呼ばれた男

CHIHEI NAKAMURA

南国の光と憂愁を  
愛した小説家

### 中村地平 (1908～1963)

宮崎市出身の作家。東京帝国大学大在学中に井伏鱒二に師事し、太宰治、小山祐土とともに「井伏門下の三羽鳥」と称されました。宮崎市への帰郷後は、日向日日新聞（現宮崎日日新聞）、県立図書館長、宮崎相互銀行（現宮崎太陽銀行）社長も務めました。



#### ● 盟友・太宰治との絆

大学入学試験で出会って以来の盟友。激しい情熱をぶつける太宰に対し、地平はそれを静かに受け止める存在でしたが、互いに才能を認め合い、激しく反発もしあう「青春の光と影」のような関係でした。

#### ● 図書館を変えた情熱

戦後は「文人館長」として宮崎県立図書館の改革に尽力。移動図書館「やまびこ号」の運行や植栽活動を通じ、荒廃した戦後の心に文化の灯をともし続けました。

# 中村地平 文学散歩

南方への夢、目向の光  
忘れえぬ物語を訪ねて



## BIOGRAPHY

# 宮崎から台湾、東京、そして再び宮崎へ

- 明治 41 (1908) / 0 歳  
宮崎市淀川町の裕福な商家に生まれる。生家のすぐ近くには大淀川が流れ、自然豊かな情景に触れながら育つ。
- 大正 15 (1926) / 18 歳  
佐藤春夫の作品を通して台湾に魅せられ、台湾総督府立台北高等学校に入学。旧制宮崎中学校時代には同級生の村社講平（後の五輪陸上競技選手）らと親交を結ぶ。
- 昭和 5 (1930) / 22 歳  
台北高校卒業。東京帝国大学文学部美術史科に入学。入試会場で大宰治と出会う。井伏鱒二に師事し「井伏門下の三羽鳥」と呼ばれる。
- 昭和 7 (1932) / 24 歳  
「熱帯柳の種子」を雑誌『作品』に発表し、文壇デビュー。佐藤春夫から賛辞を受ける。
- 昭和 9 (1934) / 26 歳  
都新聞社（現・東京新聞）に入社。後に退社し作家活動に専念。文士仲間との阿佐ヶ谷将棋会の常連となる。
- 昭和 12 (1937) / 29 歳  
「土龍どもぼつくり」が第 5 回芥川賞候補となる。兄が戦死。自身も召集されるが即日帰郷。
- 昭和 13 (1938) / 30 歳  
「南方郵信」で再び芥川賞候補に。「南方文学」の旗手として注目を浴びる。
- 昭和 14 (1939) / 31 歳  
この年台湾に取材旅行。「蕃界の女」「霧の蕃社」など台湾を舞台にした作品を次々と発表。
- 昭和 19 (1944) / 36 歳  
戦況悪化に伴い、家族と宮崎へ疎開。
- 昭和 22 (1947) / 39 歳  
宮崎県立図書館長に就任（～昭和 32 年）。移動図書館「やまびこ号」の運行、開架式の導入など画期的な改革を行う。
- 昭和 25 (1950) / 42 歳  
「八年間」で 3 度目の芥川賞候補となる。第 1 回宮崎県文化賞を受賞。
- 昭和 32 (1957) / 49 歳  
図書館長を退任。父が社長を務める宮崎相互銀行（現・宮崎太陽銀行）の取締役役に就任。
- 昭和 38 (1963) / 55 歳  
2 月 26 日心臓麻痺のため自宅にて急逝。享年 55 歳。

## 中村地平ゆかりの地をめぐる おすすめルート

①文学碑 ▶ ②帰郷後自宅後 ▶ ③生誕地 ▶ ④晩年期 ▶ ⑤墓所

### ②帰郷後邸宅跡（西橘通り）

図書館長時代の地平が家族と過ごした邸宅跡。小説「八年間」での舞台であり、戦後宮崎の文化復興を支えた温かな記憶の場所です。

### ⑤墓所（福島町墓地）

愛宕山の一面に佇む中村家の墓。「子供の像」では兄の墓参りをする場面が描かれている。

### ④晩年期（淀川雨水ポンプ場）

図書館長退任後、銀行経営に携わりつつ晩年を過ごした邸宅跡。銀行を病気でやめ、静養するようになってからも、病床に原稿用紙を置き、最期まで創作への情熱を燃やし続けました。

### ①文学碑（市民の森）

没後10年を機に、作品『日向』で描かれた古事記の舞台である一ツ葉に建立。自筆の「雲はどこにでも似つかはしい姿で現れる」が刻まれ、氏の愛した自然と調和しています。

### ③生誕地

（※橘橋南詰西側堤防に看板があります）大淀川畔の肥料問屋に生まれ、兄との勉強部屋から望んだ大淀川の雄大な流れは、名作「南方郵信」の世界へとつながっています。

宮崎市教育委員会文化財課

協力：宮崎大学名誉教授 岡林 稔

〒889-1696

宮崎市清武町西新町1番地1

清武総合支所

TEL : (0985)85-1178

FAX : (0985)84-2222

mail : 45bunsin@city.miyazaki.miyazaki.jp

